

学生の「教職イメージ」の変遷（1990～2012）

—教職課程で授業を行うにあたって—

A Change of Teaching Job Imagery for College Students in Teacher-Training Cours

岡 林 春 雄

Haruo OKABAYASHI

目的

教職課程の学生たちは、「教職」に対してどのようなイメージをもって大学に入ってきているのだろうか。教職イメージは、本人の小学校、中学校、高等学校を通しての学校体験と家族を含む社会での「教職」というものの受け入れ方、そして、本人のそれらのものとのとらえ方の相互作用によって出来上がってくるものと思われる。教職課程で学習するにあたっては、その「教職イメージ」がいろいろな形で影響してくることになる。教授者は、それぞれの学生がもっている「教職イメージ」をつかんでおき、時には、そのイメージをあえて崩すこと（概念崩し）も必要であろう。

本調査では、教職課程の学生たちが「教職」に対して、どのようなイメージをもって大学に入ってくるのか、そのイメージのプロトタイプをつかみ、さらに、そのイメージが年によってどのように変化しているのかを探ってみたい。

調査

調査対象者：教職課程への入学者 総計1019人（女性706人、男性313人）

1990年度 73人, 1992年度 57人, 1997年度 122人, 2000年度 117人
2001年度 135人, 2002年度 97人, 2005年度 122人, 2006年度 175人
2012年度 121人

調査項目：

[A] 教職について

1. 教職についてのイメージ：結果に示す16対の項目（5段階評定）
2. 教職につきたいと考えているかどうか（3段階評定）

[B] 学校体験

小学校、中学校、高等学校、それぞれの時期に

1. 先生との楽しい思い出があったか（3段階評定）
2. 学校に行きたくなくなったことがあったか（3段階評定）
3. 実際に、風邪など病気以外の理由で学校に行かなかったことがあったか（3段階評定）

[C] その他の情報

心的エネルギーに基づく一般的パーソナリティ検査（向性検査）ならびに、本学（本課程）に進学した理由、将来計画についての自由記述

結果

各項目の全体的な特徴

学生たちの心的エネルギーが外に向く傾向が強いのか、内に向く傾向が強いのかを確認した向性指数（VQ）に関して、全体VQ平均は106.7（ $\sigma=24.824$ ）であり、2001年度のVQ平均102.0（ $\sigma=27.055$ ）

から1992年度のVQ平均112.7 ($\sigma=25.524$) の間で推移している。専門学校生や他の大学生への調査で、現代の日本の若者の全体としての平均VQは、常に100を若干超え、110前後のところまでで推移している。本研究での学生集団は、向性という一般的パーソナリティ面では現代社会の中できわめて平均的な集団だといえよう。

それでは、教職イメージに関わる項目を見ていこう。項目評定は対になっているので、対の左項目の最高値が5である。評定値が3を超えていれば、その項目の傾向が出ており、5に近くなればなるほどその傾向が強くと評定されていると考えられる。

[清い—汚い]

全体の平均値3.49 ($\sigma=.940$)。最低値である2006年度の平均は3.38 ($\sigma=.963$)、最高値である1992年度の平均は3.93 ($\sigma=.997$) である。「教職は聖職である」と言われることは少なくなってきたはいるが、毎年、教職はそれなりに「清い」というイメージがあり、1992年度はその傾向が高い。

[遠い—近い]

全体の平均値2.79 ($\sigma=1.199$)。1992年度の平均値2.42 ($\sigma=1.267$) から2006年度の平均値2.99 ($\sigma=1.253$) の間で推移している。この項目は、毎年、個人差が大きく、教員養成課程に入ってきたのだが、教師になるという具体的な目標をもって入ってきた人と、まだ漠然とした思いしかない人、また、親などに言われて教員養成課程にきたがそれに反発しているという人、といったいろいろな人が存在しており、「教職が（自分にとって）遠い（近い）」の感覚差になっている。

[現実的—夢のような]

全体の平均値3.94 ($\sigma=1.069$)。2000年度の平均値3.69 ($\sigma=1.207$) から2012年度の平均値4.24 ($\sigma=.966$) の間で推移している。全体的に、教職を現実的にとらえている。

[静かな—さわがしい]

全体の平均値2.66 ($\sigma=1.027$)。2002年度の平均値2.56 ($\sigma=.993$) から1997年度の平均値2.83 ($\sigma=1.034$) の間で推移している。教職は静かだとはとらえられていない。これは、日頃の授業風景、また、学校でのいろいろな活動の様子からきていると考えられる。

[特色ある—平凡な]

全体の平均値3.46 ($\sigma=1.319$)。2000年度の平均値3.27 ($\sigma=1.441$) から2001年度の平均値3.78 ($\sigma=1.218$) の間で推移している。

[とまっている—動いている]

全体の平均値2.12 ($\sigma=1.209$)。2012年度の平均値1.84 ($\sigma=1.033$) から1990年度の平均値2.41 ($\sigma=1.305$) の間で推移している。

[重い—軽い]

全体の平均値3.98 ($\sigma=.957$)。2005年度の平均値3.78 ($\sigma=1.049$) から1992年度の平均値4.11 ($\sigma=.958$) の間で推移している。教職は、かなり重いものとしてとらえられている。

[明るい—暗い]

全体の平均値3.75 ($\sigma=1.028$)。1990年度の平均値3.27 ($\sigma=1.014$) から2012年度の平均値3.87 ($\sigma=.921$) の間で推移している。この項目は、個人差が大きいのだが、全体的には教職は明るいものだととらえられている。児童・生徒と触れ合うイメージからきているものと考えられるが、中野富士見中学いじめ自殺事件（1986）の余韻が残る1990年度では、やはり微妙な数値になっている。2012年度はかなり明るいイメージが出てきているが、本調査は、大津いじめ自殺事件（2011）の問題がメディアに出てくる前であった。もし、後であったら、大きく違って来たであろう。教職イメージは、メディア報道の影響を受けている。

[みにくい—美しい]

全体の平均値2.63 ($\sigma=0.809$)。2012年度の平均値2.45 ($\sigma=0.866$) から2001年度の平均値2.79 ($\sigma=0.805$) の間で推移している。さすがに教員養成課程の学生たちであるので、みにくい傾向は少なく、標準偏差も小さいのだが、もっと対極に振れないところに現在の教育現場の問題があるようだ。

[健康な—不健康な]

全体の平均値3.88 ($\sigma=1.147$)。2001年度の平均値3.81 ($\sigma=1.160$) から1990年度の平均値4.00 ($\sigma=1.014$) の間で推移している。全体的に、教職は健康なイメージがあるようだが、標準偏差が高く、個人差が見られる。1990年度頃は、まだしも教育を行う状況があり、したがって、健康なイメージが強かったのであろう。それに対して、その後、「教師は多忙」であるという話題がメディアでよくとりあげられ、また、教育現場でのいろいろな問題が報道される中で、健康なイメージは減少しているように思われる。

[派手な—地味な]

全体の平均値2.31 ($\sigma=0.959$)。1992年度の平均値1.86 ($\sigma=0.875$) から2005年度の平均値2.52 ($\sigma=0.911$) の間で推移している。教職には、派手なイメージは強くないようである。

[強い—弱い]

全体の平均値3.64 ($\sigma=1.031$)。2001年度の平均値3.47 ($\sigma=1.074$) から1992年度の平均値3.93 ($\sigma=1.067$) の間で推移している。教職には、若干、強いイメージがあるようだ。これは、「教え込む」イメージ、力で暴力問題などを抑え込んだ管理教育のイメージが年度によっては高い傾向があるためだと思われる。

[くさった—新鮮な]

全体の平均値2.60 ($\sigma=0.907$)。1992年度の平均値2.39 ($\sigma=1.013$) から1990年度の平均値2.76 ($\sigma=0.836$) の間で推移している。さすがに、教職に対してくさったイメージは少ないようであるが、1990年度には微妙なデータになっている。むしろ、1990年度には「崩れかけている教育現場を(自分が)立て直す」といった主張をする気概をもった学生も見られた。

[ぼんやりした—はっきりした]

全体の平均値2.23 ($\sigma=1.063$)。2012年度の平均値1.98 ($\sigma=0.940$) から1990年度の平均値2.51 ($\sigma=0.969$) の間で推移している。ぼんやりしたイメージは少ない。

[楽しい—苦しい]

全体の平均値3.22 ($\sigma=1.177$)。2000年度の平均値3.02 ($\sigma=1.246$) から2005年度の平均値3.49 ($\sigma=1.123$) の間で推移している。学生は、教職は楽しいとは単純に言えない、と思っているようである。標準偏差が高いうえに、2000年度などは平均値が3.02と3.00に近くなっている。教職に就きたいと思い、教員養成課程に進学しながらも、職業としての教員は、そんなに楽しいものではない、ととらえている。1990年度から2005年度頃までは、「子どもと接することは楽しいが、保護者とうまくやれるか心配」(中学校教員志望者は別表現をするので除く) といった反応が多かったのだが、2006年度以降、「子どもと接することが心配・不安」だという学生が増えてきた。教職に就きたいと思う理由、教員養成課程に進学しようと考えた理由が変わってきているのかもしれない。

[自由な—窮屈な]

全体の平均値2.54 ($\sigma=1.105$)。2006年度の平均値2.39 ($\sigma=1.021$) から1990年度の平均値2.76 ($\sigma=1.189$) の間で推移している。学生は、全体に、教職は自由である、とはとらえていない。むしろ、どちらかと言えば、窮屈なイメージがあるようだ。とくに、2006年度などは、その傾向が強い。幹葉図 (Stem-and-Leaf Plot) を見ておこう (Figure 1)。1990年度、1992年度には、教職は自由だととらえている学生の幅が広いのに、それ以後は、教職は少し窮屈な方向に収束してきているのがわかる。

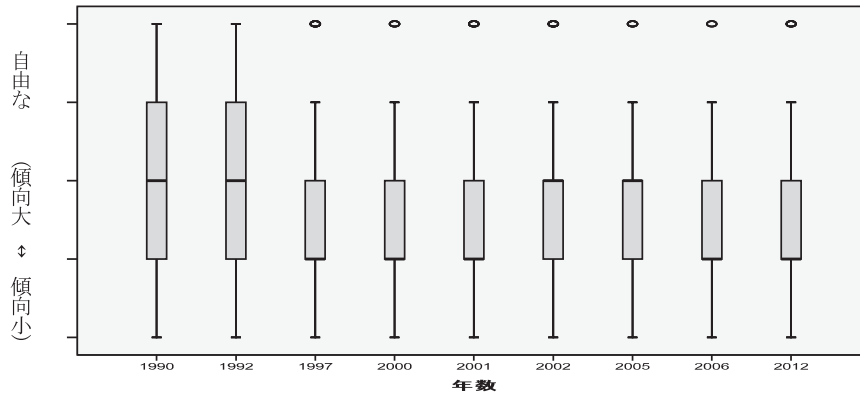


Figure 1 [自由な—窮屈な]の反応分布

各項目・年度間変化

上記の教職イメージを調べた対項目の中で、年度間で有意差の出現した項目について確認してみた。[清い—汚い] $F(8, 1004)=3.079, p=.002$, [遠い—近い] $F(8, 1004)=2.568, p=.009$, [現実的—夢のような] $F(8, 1004)=3.129, p=.002$, [よい—わるい] $F(8, 1004)=3.278, p=.001$, [特色ある—平凡な] $F(8, 1004)=2.351, p=.017$, [重い—軽い] $F(8, 1004)=2.083, p=.035$, [明るい—暗い] $F(8, 1004)=4.728, p=.000$, [みにくい—美しい] $F(8, 1004)=2.188, p=.026$, [派手な—地味な] $F(8, 1004)=5.364, p=.000$, [ぼんやりした—はっきりした] $F(8, 1004)=2.549, p=.009$, [楽しい—苦しい] $F(8, 1004)=2.769, p=.005$ $F(8, 1004)=5.364, p=.000$, などの項目で年度間有意差が見出された。そこで、これらの項目に関して Tukey HSD を使い、下位検定を行う。

[清い—汚い]

1990年度～1992年度 ($p=.045$), 1992年度～2000年度 ($p=.021$), 1992年度～2001年度 ($p=.004$), 1992年度～2002年度 ($p=.029$), 1992年度～2006年度 ($p=.004$) の間に有意差が見られることにより、1992年度が他の年度に比べて特別に高い。

[遠い—近い]

1990年度～2006年度 ($p=.010$), 1992年度～2006年度 ($p=.044$), 1997年度～2012年度 ($p=.016$), 2000年度～2012年度 ($p=.002$) の間に有意差が見出された。2000年度以前は、教職が近い感覚があったのだが、2000年度を過ぎ出すと、遠いという感覚にはなっていないが、徐々に教職が近い感覚が薄れてきているようである。

[現実的—夢のような]

1997年度～2012年度 ($p=.016$), 2000年度～2012年度 ($p=.002$) の間に有意差が見出された。1997年度、2000年度あたりで教職への現実感が薄らぐ傾向があったようだ。

[特色ある—平凡な]

1990年度～2001年度 ($p=.040$) の間に有意差が見出された。1990年度には、教職は特色あるとはあまり思われていなかったようだ。

[重い—軽い]

2000年度～2005年度 ($p=.035$) の間に有意差が見いだされた。2000年度は、教職がかなり重いものだという感覚がある。

[明るい—暗い]

1990年度～2002年度 ($p=.000$), 1990年度～2005年度 ($p=.000$), 1990年度～2006年度 ($p=.002$),

1990年度～2012年度 ($p=.003$) の間に有意差が見出され、1990年度の教職があまり明るくないととらえている傾向が顕著である。

[みにくい—美しい]

2001年度～2012年度 ($p=.019$) の間に有意差が見出され、2001年度より2012年度の方が教職を美しいととらえていることがわかる。

[派手な—地味な]

1990年度～2002年度 ($p=.019$), 1990年度～2005年度 ($p=.004$), 1990年度～2006年度 ($p=.012$), 1992年度～2001年度 ($p=.017$), 1992年度～2002年度 ($p=.002$), 1992年度～2005年度 ($p=.000$), 1992年度～2006年度 ($p=.001$), 1992年度～2012年度 ($p=.015$) の間に有意差が見出された。2000年を過ぎ出すと、教職が地味であるといったイメージが減ってきている。

[ぼんやりした—はっきりした]

1990年度～2012年度 ($p=.026$) の間に有意差が見出された。1990年度より2012年度の方が教職イメージははっきりしているようである。

[楽しい—苦しい]

2000年度～2002年度 ($p=.032$), 2000年度～2005年度 ($p=.046$) の間に有意差が見出された。2002年度、2005年度は、教職が楽しいととらえているのだが、2000年度は、教職が楽しいとはとらえていないようである。

ここで、年度間に有意な差がある「明るい」、「楽しい」、「遠い」、「派手な」項目に関して、年度変化をグラフにしてみた (Figure 2)。Figure 2からわかるように、それぞれの項目は揺れを示しながら、「明るい」イメージは2001～2005年度で高くなっており、「楽しい」イメージは1997、2002、2005年度と高くなっているが、その他の年度ではあまり高くないことがわかる。「遠い」イメージは、2002、2012年度で下がっているものの、1990年度から徐々に上がってきていることがわかる。さらに、「派手な」イメージは、全年度でそれほど高くないものの、徐々に2.5付近に近付いていることがわかる。

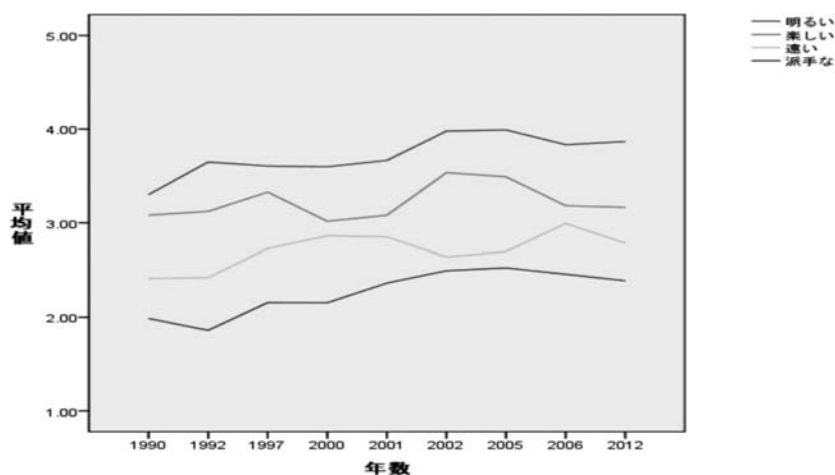


Figure 2 教職イメージ：「明るい」「楽しい」「遠い」「派手な」(上から順番に)の年度変化

教職に就きたいと思っているのかどうかと教職イメージの関連

年度を合わせて、教職に就きたいと思っているのは661人 (64.9%)、どちらとも言えないのは210人 (20.6%)、教職に就きたいと思っていないのは148人 (14.5%)であった。教職に就きたいと思っ

ている人は、そう思っていない人に比べて、明らかに教職を「清い」($p=.000$)、「近い」($p=.001$)、「静」($p=.027$)、「特色ある」($p=.003$)、「動いている」($p=.000$)、「重い」($p=.004$)、「明るい」($p=.000$)、「美しい」($p=.000$)、「健康な」($p=.000$)、「地味な」($p=.001$)、「強い」($p=.000$)、「新鮮な」($p=.000$)、「はっきりした」($p=.000$)、「楽しい」($p=.000$)、「自由な」($p=.000$) ととらえていた。

学校体験が教職イメージ・各項目にどのように影響しているのか

(1) 先生との楽しい思い出

「先生との楽しい思い出があるかどうか」についての基礎データは Table 1 の通りである。

Table 1 「先生との楽しい思い出があるかどうか」基礎データ				Table 2 「学校に行きたくなくなったことがある」基礎データ			
小学校	ある	824人	(80.9%)	小学校	ある	436人	(42.8%)
	?	49人	(4.8%)		?	32人	(3.1%)
	ない	146人	(14.3%)		ない	551人	(54.1%)
中学校	ある	755人	(74.1%)	中学校	ある	473人	(46.4%)
	?	51人	(5.0%)		?	19人	(1.9%)
	ない	213人	(20.9%)		ない	527人	(51.7%)
高等学校	ある	699人	(68.6%)	高等学校	ある	438人	(43.0%)
	?	76人	(7.5%)		?	15人	(1.5%)
	ない	244人	(23.9%)		ない	566人	(55.5%)

小中高を通して「先生との楽しい思い出がある」人は492人(48.3%)、「ない」人は36人(3.5%)であった。それぞれの時期に、先生との楽しい思い出があった人を「あり群」とし、なかった人を「なし群」、わからない人を「?群」として、それぞれの群の教職イメージの違いを調べてみた。小学校の時期では、[清い—汚い] (あり群がなし群より「清い」ととらえている: Tukey HSD $p=.001$), [遠い—近い] (なし群があり群より「遠い」ととらえている: $p=.015$; ?群があり群より「遠い」ととらえている: $p=.021$), [現実的—夢のような] (あり群が?群より「現実的」だととらえている: $p=.001$; なし群は?群より「現実的」だととらえている: $p=.023$), [よい—わるい] (あり群はなし群より「よい」ととらえている: $p=.001$), [特色ある—平凡な] (あり群はなし群より「特色ある」ととらえている: $p=.001$), [とまっている—動いている] (なし群はあり群より「とまっている」ととらえている: $p=.033$), [明るい—暗い] (あり群はなし群より「明るい」ととらえている: $p=.004$; あり群は?群より「明るい」ととらえている: $p=.003$), [みにくい—美しい] (なし群はあり群より「みにくい」ととらえている: $p=.001$), [健康な—不健康な] (あり群はなし群より「健康な」イメージでとらえている: $p=.033$), [強い—弱い] (あり群はなし群より「強い」イメージでとらえている: $p=.020$; あり群は?群より「強い」イメージでとらえている: $p=.013$), [くさった—新鮮な] (なし群はあり群より「くさった」イメージでとらえている: $p=.012$), [楽しい—苦しい] (あり群はなし群より「楽しい」イメージでとらえている: $p=.002$), [自由な—窮屈な] (あり群はなし群より「楽しい」イメージでとらえている: $p=.000$) といった項目で、それぞれ有意差が見出された。

同様に、中学校の時期では、あり群がなし群より「清い」($p=.000$)、「よい」($p=.000$)、「特色ある」

($p=.000$), 「動いている」($p=.000$), 「明るい」($p=.000$), 「美しい」($p=.001$), 「強い」($p=.008$), 「新鮮な」($p=.001$), 「はっきりした」($p=.001$), 「楽しい」($p=.008$) といった項目で有意差が見出された。高校の時期では、あり群がなし群より「清い」($p=.001$), 「よい」($p=.001$), 「特色ある」($p=.039$), 「動いている」($p=.000$), 「明るい」($p=.000$), 「美しい」($p=.021$), 「強い」($p=.000$), 「新鮮な」($p=.002$), 「はっきりした」($p=.016$), 「楽しい」($p=.001$), 「自由な」($p=.000$) といった項目で、それぞれ有意差が見出された。

(2) 学校に行きたくなくなったことがある

「学校に行きたくなくなったことがある」についての基礎データは Table 2 の通りである。

小中高を通して、学校に行きたくなくなったことがある人は 210 人 (20.6%)、そんなことはないという人は 298 人 (29.2%) であった。学校に行きたくなくなった人の方が、他の人たちに比べて、教職を「とまっている」($p=.008$)、「腐った」($p=.001$)、「ぼんやりした」($p=.001$)、「苦しい」($p=.006$) ととらえている。

(3) 実際に、風邪などの病気以外の理由で、学校に行かなかったことがある

「実際に、風邪などの病気以外の理由で、学校に行かなかったことがある」についての基礎データは Table 3 の通りである。

小学校	ある	177 人	(17.4%)
	?	11 人	(1.0%)
	ない	831 人	(81.6%)
中学校	ある	198 人	(19.4%)
	?	7 人	(0.70%)
	ない	814 人	(79.9%)
高等学校	ある	284 人	(27.9%)
	?	5 人	(0.5%)
	ない	730 人	(71.6%)

小学校・中学校・高等学校にわたって実際に学校に行かなかったことがある人たち (73 人) は、小・中・高を通して実際に学校に行かなかったことがない人たち (590 人) に比べて、「教職は窮屈だ (自由でない)」というイメージをもっている ($F(1,1018)=6.84$, $p=.009$)。小学校、中学校、高等学校を分けて実際に学校に行かなかった人との違いを見てみると、実際に学校に行かなかった人は、そういうことのなかった人たちに比べて、より、教職は窮屈であるととらえる傾向にはあるが、有意差は見出されていない。

考 察

本調査から、1990 年度～2012 年度に教員養成課程に入学した学生の「教職イメージ」は、「清い」といったイメージは安定しているものの、「明るい」「楽しい」「遠い」「派手な」といったイメージは年度間で

有意差が見出された。また、小学校の先生と良い思い出があるかどうかによって「遠い」イメージが、中学校の先生と良い思い出があるかによって「とまっている」、「明るい」、「強い」、「腐った」、「ぼんやりした」イメージが、高校の先生と楽しい思い出があるかどうかによって、「明るい」、「強い」イメージが、さらに、中学校ならびに高校の先生と楽しい思い出があるかによって「腐った」が、小学、中学、高校の先生と楽しい思い出があるかによって「止まっている」イメージが影響を受けていた。

Elbaz(1981)は、自覚化されず機能する教師の暗黙知は、個々の教師が自らの経験から獲得したものであると述べているが、この暗黙知は、本調査での教職イメージと結びついており、一度教職に就いてからでは、なかなか意識化できないものである。少なくとも、大学の授業においては、学生の教職イメージと結びついた暗黙知を意識化しておく必要がある。

本調査で対象となったのは、「詰め込み教育」路線への反省から1980年の学習指導要領の改訂で始まったゆとり教育の影響を受け、さらに、「ゆとり教育」への批判が出され、授業時間数などが増えることが宣言された状況の中での若者たちの教職イメージである。鹿川君のいじめ自殺事件（1986年）以後、マスメディアでいじめ問題が断続的に取り扱われ、「酒鬼薔薇事件」（1997年）で事件を起こした少年が14歳の中学生であったがため、思春期の危うさが指摘され、中学生への対応は難しいといった論調が一般に広がり、「中学教師にはなりたくない」という教員志望学生が増えたりした。モンスターペアレントなどという現象の影響もあろう。ただし、学生の教職イメージにとって、これらの要因は、背景要因または間接要因と言えよう。やはり、学生の教職イメージに直接的に影響していると思われるのは、「先生と楽しい思い出がある」、「良い先生に出会った」といった体験であろう。本調査でも、「学校体験」は、教職イメージに深く影響を与えている。しかし、どの年度でも同じような学校体験をしているわけではない。2012年度の学生にも、教員志望動機に「今の教育を変えたい」という者がいた。この学生は、「先生との楽しい思い出はなく」、「良い先生に出会ったことはない」と言うのである。以前は、自分の出会った先生が魅力的だったから自分も先生になりたい（先生との楽しい思い出がある）といった学生が多かったのだが、近年では、先生との楽しい思い出がない学生も増えてきている。自分は、先生との楽しい思い出があり、「今の（世の中で行われている一般的な）教育を変えたい」というのと、先生との楽しい思い出がなく、「今の教育を変えたい」というのは、具体的なイメージがあるかどうか、大きな違いになってこよう。

また、近年の傾向として、将来、「特別支援学校または小学校の教師、または、青年海外協力隊（海外ボランティア）」といった希望が多い。海外に目を向けることは良いことだと思うが、ボランティアといったレベルで教職をとらえる傾向がある。山崎（2006）が、現職教員の「教師という仕事のやりがい」は、20歳代から30歳代、40歳代と下降し、さらに50歳代前半まで下降すると述べているように、教職はボランティア感覚ではやっていけない。そして、有馬（2004）は、教職生活について作成されるイメージは、危機的体験の解決状態によって異なると指摘している。いじめや不登校等々といった本調査での「学校体験」の解決状態が教職イメージの根底になっていると考えられる。

参考文献

- 有馬道久（2004）. 悩み・問題の解決状態からみた教職イメージの相違 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 59.
- Elbaz, F. (1981). The teacher's 'practical knowledge': A report of a case study. *Curriculum Inquiry* 11, 43-71.
- 山崎準二（2006）. 教師の力量形成に関する調査研究（V-2）：第5回目（2004）調査結果の基礎分析報告：教職観と教職イメージ 静岡大学教育実践総合センター紀要, 12, 149-164.